

Title	支那古代史論(飯島忠夫著, 東洋文庫發行)
Sub Title	
Author	宮島, 貞亮(Miyajima, Teisuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1927
Jtitle	史学 Vol.6, No.3 (1927. 9) ,p.151(463)- 154(466)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19270900-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

支那古代史論 (飯島忠夫著) (東洋文庫發行)

苟も支那古代史を考究せんとする者は、其の資料のうち、最も重要な儒教の經典に對し、嚴正な批判を下さなくてはならぬ。又天文学、考古學、土俗學等、あらゆる科學の助を藉りて、其の製作年代を明確ならしめなければならぬ。然し古書には、攙入、誤脱等が多くあるため、斯くの如き檢討は、至難中の至難事である。

われらは、新城新藏、飯島忠夫の兩氏、及びわが慶大教授橋本増吉氏等が、此の方面に、多大の貢獻をなされた事に對し、衷心敬意を表せざるを得ない。曩に東洋學報、史學雜誌、支那學等に三氏の古代史論が掲載されたが、當時學界は、均しく注目したのである。本書は三氏の一人飯島忠夫氏の力作で、今回東洋文庫論叢第五として、該文庫より刊行されたものである。

「儒教の經典に寓する理想は、即ち儒教の哲學、倫理學、政治學である。此等の諸學は天文曆法の學と互に相提携して、全體に占星術的色彩を具有してゐる。それ故に、支那古代の天文曆法の學を論究し、現今の天文学の光に照して、其の成立年代を推定することは、儒教經典の完成年代を決定するに對して、最も有力なる根據を與へるものである。儒教經典の完成年代が明瞭となれば、支那古代史の批判は其の第一歩を進め得たのである」(序)といふ

見地の下に、著者は支那古代の天文曆法の學を研鑽すること、十數年に及んだのである。従つて本書に於て、著者は職として天文曆法に關し、論及されてゐる。而して、著者が支那古代史論といふ綜括的の題目を本書に用ひられた理由は、序文中に明にされてゐる。即ち此の書に論述する所は、儒教經典と天文曆法とに限らず、此等と關聯する所の歴史、其の他諸子百家の書と、金石骨甲の刻甲の刻文と、諸種の學術とに及んでゐるからである。

本書の收むる目次は、「第一章序論」、「第二章支那古代天文学の性質」、「第三章宇宙生成論と太一陰陽五行」、「第四章星座と其の名稱」、「第五章日月五星の運行と十二辰十二次二十八宿」、「第六章冬至點」、「第七章觀測の器械」、「第八章曆法」、「第九章干支及び其の異名」、「第十章北斗及び南中星」、「第十一章古曆の六種と原曆」、「第十二章太初曆と三統曆」、「第十三章歲首及び閏月」、「第十四章蝕の週期」、「第十五章木星紀年法」、「第十六章曆法と易」、「第十七章曆法と音律」、「第十八章曆法と數學」、「第十九章天文曆法と星辰崇拜」、「第二十章天文曆法の職掌」、「第二十一章古代天文学の成立年代」、「第二十二章支那と西方との宇宙成論天文學曆法等の比較」、「第二十三章古代に於ける東西の交通と戰國時代の支那學界」、「第二十四章戰國時代の記録に於ける天文曆法(秦記呂氏春秋、及び竹書紀年)」、「第二十五章春秋の天文曆法」、「第二十六章左傳國語の天文曆法」、「第二十七章書經詩經の天文曆法」、「第二十八章古代の遺物の銘文等に於ける天文曆法」、「第二十九章結論」、「附論印度の古曆と吠陀成立の年代」等である。

斯く研究の範圍をバビロン、希臘の宇宙生成論、天文曆法の學

に及ぼし、古代に於ける東西の交通を論じ、且つ附するに印度の古曆と吠陀成立の年代とを論ずる一篇の文を以てしたのは、古代に於ける此等の諸國の學術が支那のものと多く類似して居るが爲に、此等の問題をも顧みるの必要を生じたからであると著者は言つてをられる。(序)

「序論」に於て、著者は「秦の始皇帝以後が歴史時代であることは疑ふべき餘地がない。春秋及び左傳國語によつて知るべき春秋時代、秦記及び戰國策によつて知るべき戰國時代の史實(此等はすべて史記の資料となつて居る)は傳説的分子を含有して居るから、それを審査して見る必要がある。春秋より以前は既に歴史時代では無い。太古から春秋の前に至るまでの古傳説中に含んで居る事實を検出するは容易の仕事では無いが、支那文化の起原を探究するが爲には是亦極めて必要の事である。傳説時代に關する文献として書經が最も主要なものである。文献の缺乏した古代の事實は考古學的研究によつて其の光明を投ぜらるべきものである。

支那上古の考古學的研究の資料となるべきものは、(一)龜甲獸骨文、(二)銅器文及び銅器、(三)貨幣及び兵器古鈔、(四)石器及び玉器、(五)土器、(六)刻石文である。(斯文第三篇第二號、林泰輔博士、支那上代の研究資料に就いて)しかし此等の遺物には文献の正確を立證し、文献の不備を補足する程の有力なものとは殆ど存在しない。寧ろ皆文献の力によつて解説さるべきものである。これは西方古代文明諸國と頗る其趣を異にして居る」と述べ、古代の文献にある史實の正確なことを證明する最も有力な資料は天文學的記事である。特に日蝕の記事の如きは現今の天文學の知識に

本づいて完全に其の年月日時を算定し得るものであるから、其の當否によつて、其の記事及び之を包藏する文献其物の價値を大略決定し得る。支那の古代の文献は天文學的占星術的記事を滿載してゐるもので、これは一方には古代文化の性質、古代思想の傾向を窺ふべき一の中心點であると共に他の一方には古代の史實の正確不正確を決定すべき殆ど唯一の根據である。それ故に支那古代の歴史を探り、支那文化の起原を究めようとするものは先づ支那古代の天文學に向つて研究の歩を進めねばならぬ」と言はれて居る。著者が夙に、支那古代の天文曆法の學に潛心された理由は、おのづから之を首肯し得べく、古典に見ゆる天文曆法の記事を摘出し、それを現代天文學の光に照して考覈することは、支那古代史研究上、確かに重要な研究と言はねばならぬ。

「支那古代天文學の性質」に於て、「支那古代の天文學は、總ての古代文明國に於けるもの同様に、近世の科學で謂ふ所の天文學ではなくて、占星術の性質を備へてをり、天上に於ける各種の現象は直ちに人類及地上の萬物の運命に反映し、又天子の政治の善惡は常に天に通じて其の現象を動かすものである」と述べてをられる。

「宇宙生成論と太一陰陽五行」は、支那古代天文學の大前提ともいふべき太一陰陽五行の理論を論究されたもので、其の大意は、太一は宇宙の本原を爲す所の普遍且つ絶對な元氣であり、陰陽は絶對な元氣が分化して相對的作用を爲し、これによつて萬物が現はれて來るものであり、五行は陰陽の抱合する五様の状態であつて、又木火土金水の五種の元素である。陰陽の精は日月となり、

五行の精は五個の遊星となる。元素の數を五に定めたのは、遊星の數から導かれたものであるといふのである。

「日月五星の運行と十二辰十二次二十八宿」中の「辰」の研究は精彩を極めて居る。

「古代天文學の成立年代」の大意は、天文學の成立した年代は、冬至點の測定された年代と、曆法の制定された年代と、木星週期の適用された年代とによつて決せられる。それを現今の天文學の知識に照して計算すれば、冬至點の測定されたのは、西紀前四百年附近即ち戰國の初であり、曆法制定の根據となつた觀測の時代は、恰も冬至點の測定された時代であつて、其の制定されたのは、大凡西紀前三百五十年附近のことであり、又木星週期の適用されたのは、大凡西紀前三百年附近のことである。これは戰國の中頃に當つてゐる。曆法に陰陽五行説が加味されて干支が成立し、之に依つて曆法が完成したのは、五星の週期、特に木星の週期が適用された時代である。星辰の命名にも陰陽五行説が加はつてゐるから、其の完成したのも此の時てなければならぬといふのである。

「春秋の天文曆法」に於て、「春秋には三十六個の日蝕の記事が有る。之に左傳の中の續經のみに在るもの一個を加へれば三十七個となる。此等の日蝕の正確不正確を決定するのが、春秋の記事の價値を研究するについての最初の方法でなければならぬ」と述べ、七個の疑問を提出し、最後に「春秋は即ち西方傳來の天文學的知識を經とし、在來の實録又は傳説を緯として組織されたものである。在來の實録が如何なる程度に織り込まれて居るかは容易に知

ることが出来ない。然るときは春秋の初なる B.C. 722 を以て支那に於ける歴史時代の源頭とすることは、嚴密な意味に於てはまだ承認し得られないこととなるのである。それは尙ほ左傳國語史記等と比較して研究されなければならぬ」と論じ、春秋の著作年代を B.C. 600 附近の事と推定されてゐる。

「左傳國語の天文曆法」に於て、左氏春秋と國語との關係を述べ、史記にある國語と左氏春秋とは同一書の異稱であると推測し、また清朝の剝達祿の左氏春秋考、康有爲の春秋左氏傳、左氏春秋、國語に對する見解とを紹介し、更に「左傳國語の曆法が三統曆で説き得べきものであることは、劉歆の時から唱へられて居たこと、漢書律曆志にも出て居り、唐の孔穎達の左傳正義にも一々の場合について、三統曆によつて注釋を施してゐるのであるから、既に廣く世に知られてゐることである。しかし議論の精密を期する爲に、兩書の中にある朔旦冬至と歲星との記事を擧げて尙一應の點檢を試みることにしよう」と言ひ、詳細に點檢を試みられてゐる。而して著者は春秋左氏傳の成立は劉歆が左氏春秋の中にある材料を本として、それに種々の變改と添加とを行つたもの、特に太初曆又は三統曆のみで説明し得らるる天文曆法のみで説明し得らるる天文曆法の記事は皆其の挿入したものであらうと考察し、左氏春秋の著作されたのは大體 B.C. 300 附近から後のことであらうと推測されてゐる。尙「附記」は左傳研究上、有益な記事で、著者は唐の啖助、宋の鄭樵、朱熹、清の劉逢祿、康有爲、皮錫瑞、著者の最も私淑されてゐる英國の Chalmers 等の左傳考、佛國の Charvies の左傳、國語、呂氏春秋に見える歲星の干支の

配置に關する見解、及び佛國の Saussure の左傳、國語の歳星位置に關する論究等を擧げ、最後に著者、新城新藏、及び橋本増吉三氏の左傳考の要旨を紹介されてゐる。

「書經詩經の天文曆法」に於て、著者は先づ、古文尙書、今文尙書、僞古文尙書、真古文尙書の關係に就て述べ、「真古文尙書が周代及び其の以前の著作であつたか否かは充分な研究を要する。その爲には左傳國語の曆法を採つたと同様の手段を用ひなければならぬ」と論じ、同様の點檢を試み、僞古文尙書も、真古文尙書も前漢末に出來たものとしてゐられる。尙著者は堯典の星座に關する古今東西の議論、及び著者の見解を述べてをられる。

詩經については、著者はその天文曆法の記事を點檢し、「茲にまた詩經の編纂が書經と同時代があることを思はずには居られない。詩經の詩の中には、もとより民謠、朝廷の儀式に用ひる歌、又は祭祀に用ひる歌などの形で以前から傳來して居るものも數多く有ることであらう。しかし其の三百篇の編纂の完成したのは決して書經の完成以前に溯らせることは出來ないのである」と論ぜられてゐる。

尙本書は、多數の有益な圖版、挿圖、附表を收め、錦上更に花を添ふるの觀がある。

要するに本書は、著者其の人の豊富な學殖と、繊細な觀察とによつて成つた大作であつて、われらは此の至難な研鑽に多年従事された著者に痛く敬意を表せざるを得ない。これ敢て江湖に推薦する所以である。

紹介者の遺憾とするところは、紙數に限りあるため、充分紹介

することが出來なかつたことである。また紹介した所でも、曲解さるるやうな所があるやも圖られない。これは淺學非才の紹介者の責任であつて、此の點は、切に著者の御寛恕を希ふ次第である。(宮島貞亮)

E. A. Wallis Budge: *The Rise & Progress of Assyriology.*
London, 1925.

アッシリア學が今日の進歩を遂げるまでに、如何に多くの學者の心血が注がれたかを知ることは單にアッシリア學に興味を有する者許りでなく、進んでアッシリア學を研究せんとする者の是非とも知らなければならぬ事柄であると思ふ。

Rogers の *History of Babylonia and Assyria* と Jastrow の *The Civilization of Babylonia and Assyria* 等を始めとして、アッシリアに關する諸書にはアッシリア學の進歩發達に關して詳細なる説明が行はれて居るが、本書の如く斯學の起原より現在に至るまでの發達の經過を細大漏さずまとめたものは他に類を見ない。而も著者ベツシ博士は斯學の權威者として第一に推すべき人物である點に於てをやである。

著者は一八八三年大英博物館のアッシリア部の助手に任命される以前、既に十一年の間アッシリア學の研究に没頭し、この間に楔型文字を解讀した英吉利の學者の殆ど悉く知已を得た。加ふるに著者が四十一年の長い間大英博物館に職を奉ずる間、同博物館